『人文学報』第108号（2015年 12 月）
（京都大学人文科学研究所）

「神の声を聴く　――カオダイ教，道院，大本教の神託比較研究――」の趣旨説明

吉　永　進　一*

近年，近代仏教史研究は目覚ましく進展してきたといえるが，その成果のひとつとして「オカルティズム」の歴史的意義を明らかにしたという点があげられる。オカルティズム（あるいはエソテリシズム）について定義はいろいろ挙げられるが，具体的には 1848 年に始まるスピリチュアリズムとそこから派生した儀礼魔術や神智学などを指し，従来は「迷信」や「誤解された仏教」といった否定的な評価しか与えられてこなかった。

言うまでもなく，近代において仏教などのアジア宗教は西洋の文化的影響を大きく受けており，自然科学，人文科学，キリスト教の影響（あるいは打撃）は大きい。自然科学では，禅僧原坦山のように蘭学の身体論をいち早く取り入れた者や，井上円了のように科学による迷信撲滅を進めた者が出現している。キリスト教は植民地主義を背景にアジア宗教を圧迫しただけでなく，近代化のモデルを提供している。インドではユニテリアンに影響を受けたブラーモ・サマージ，日本ではプロテスタントに感化され，新仏教運動の原点となった中西牛郎がその例である。東洋学や言語学といった人文科学は，仏教の学問的研究を構築し，西洋の仏教学は日本における仏教学の成立を促し，仏教系大学などを通じて日本人の仏教理解に一定の影響を与え続けている。

これらの制度化された知や信仰と比べると「オカルティズム」の影響は評価しにくい。スピリチュアリズムは伝道の組織を欠き書籍という形で伝わった。神智学はアジア各地に組織を広げているが，各支部の自立性は高い。日本ではいくつかの団体が生まれたが，ほとんど短命に終わった。そうではあるにせよ，スリランカは言うまでもなく，日本のように神智学運動が根付かなかった地域でさえ，仏教復興に神智学の果たした役割は大きい。さらに，他の西洋からの文化影響が一方向的なものであるのに対して，オカルティズムというチャンネルは東洋宗教に対して双方向的であった。多くのオカルティストは，東洋宗教に対してしかるべき敬意を払い，実践すべき教義として理解（たとえ誤読を含んでいようとも）しようとした。神智学を経由

* よしなが しんいち　国立舞鶴工業高等専門学校

して仏教に参入した欧米人は鈴木大拙を欧米に紹介したクリスマス・ハンフリーズなど数多く，黄金の曙教団というイギリスの魔術結社出身のアナンダ・メッテイヤの仏教への傾倒と布教活動はよく知られたところである。

さて，近代仏教研究において，オカルティズムを正当に評価した先駆者は，アメリカの宗教学者トマス・ツイードであろう。近年の宗教研究では，近代オカルティズムをルネサンス以来の西洋秘教思想の伝統に位置づけようという「隠れた」西洋史の発掘が進む一方で，ツイードの後を追う形で，アジア宗教の研究者からはオカルティズムを近代化，グローバル化の要因として評価しようという動きがある。たとえば，スーフィズムの研究者ナイル・グリーンは，2012 年の 126 回アメリカ史学会において，ツイードを含めた 4 名の研究者による「グローバル・オカルト：文化接続の「隠れた」対抗的潮流」（The Global Occult : The “Hidden” Counter-Currents of Cultural Connectivity）と題する野心的なパネルを組織している（このパネルの一部は論文化され *History of Religions,* Vol. 54, No. 4（May 2015）に収録されている）。あるいは，こうした動きとは別に，イスラエルの現代カバラ研究者ボアズ・ウースは，カバラのグローバル化の要因として神智学を評価して研究を展開している（たとえば Boaz Huss et. al eds., *Kabbalah and Modernity : Interpretations, Transformations, Adaptations*（Brill, 2010）を参照）。

本パネルの企画は，結果的にこうした研究動向と連動したものとなったが，元々はスピリチュアリズムがアジアの新宗教に及ぼした影響を検討しようという単純な着想から生まれたものであった。たとえば大本教には，幕末の国学者本田親徳によって再編成された鎮魂帰神の法という，憑依をコントロールする技法がある。この技法自体は，近世以前の祈祷法を再編集したものと想像されるが，これを大本教の出口王仁三郎に伝授した長沢雄楯は，第一次大本事件の際に大審院へ提出した上申書の中で，鎮魂帰神をスピリチュアリズムと比較している。あるいは，第一次大本事件まで実質的に運動の中心となっていた幹部の浅野和三郎は，大本教を離れた後に心霊研究協会を興し，日本的スピリチュアリズムの創始者となっている。さらに教理の根幹に関する点では，出口王仁三郎は，『霊界物語』執筆において，鈴木大拙訳のスウェーデンボルグ『天界と地獄』を参照していた。その大本教と関係のあるカオダイ教，道院のいずれもが，なんらかの形でスピリチュアリズムと関わりがある。今回のこのワークショップは，これらの宗教を，神的存在との交流という立教の原点にしぼって比較しようとした。髙津は，フォ・ロアン（中国のフーチ）とサイ・バン（テーブルターニング）という二つの技法について論じ，宮田は道院の「霊学」へのスピリチュアリズムの影響と，それがもたらした思想の変容を論じた。永岡は，鎮魂帰神の霊的な統御面に注目し，その抑圧的な性格を論じている。

大本，カオダイ，道院などを含む東アジア新宗教の比較論は，すでに武内房司の編集による論集『越境する近代東アジアの民衆宗教』（明石書店，2011）があり，本パネル発表者もその論集に参加した研究者と重なっているが，それとはいささか異なる視点からの議論となった。残

念ながら，発表者，コメンテータの全員から原稿をいただけることはできなかったが，当日の議論がかなり密度の濃いものとなったことはここに収録した二本の論文と一本のコメントだけでも分かるかと思う。なお，今回の企画を実現するにあたっては，大澤広嗣氏（文化庁宗務課）の協力なくしては不可能であった。ここに記して感謝したい。

なお，当日のスピーカーは以下の通りである。

発表

1. 髙津茂（星槎大学）「カオダイ教におけるフォ・ロアンとサイ・バン」
2. 宮田義矢（駒澤大学）「道院の霊学」
3. 永岡崇（南山宗教文化研究所）「霊魂をとらえ損ねる ―― 神の声から考える民衆宗教大本」
4. 出口三平「大本・その宗教提携の事例と原由」

コメント

1　塚田穂高（國學院大學）
2　武内房司（学習院大学）
3　佐々充昭（立命館大学）